

聞名仏教

第 156 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 9 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

人の力の限界

佐々木蓮磨

人知が進んでくると、一

つの恐るべき迷信がうまれ
てきます。それは人間の能
力を過信するということだ
す。この迷信のために優秀
な人材が不慮の災害に遭遇
することがしばしばあるこ
とに気がつくのであります。

最近、福岡の田村宏明氏
がヒマラヤの処女峰を征服
したというニュースがあり
ました。この事実を簡単に
聞くと、すぐその人間を英
雄化し、人間の力で、如何
なる山岳でも征服できるか
のような錯覚を起し易い
ものです。ところが実情を
調べてみると、その当時は稀
に見る晴天つづきで、全く
天候に恵まれたことが大き
な原因になっているという
ことでもあります。

その反面には、過日南ア
ルプスで遭難した五人のパ
ーティーは有名な山のベテ
ランで、準備と経験とを十
二分に身につけておりなが

らも全滅の悲運に遭って
いるのです。これは彼らの準
備と経験とをもってしても
抗し得ない自然の威力に征
服されたというべきでしょ
う。

過日、当臼杵市に一家四
人が焼死したという惨事が
ありました。誰が考えても
助かる方法はあったと思わ
れるのですが、それが一人
も助からなかったというこ
とは、人間能力の及ばぬ力
が働いていたと見なくては
なりません。第三者は「こ
うすればよかったのだ」「あ
すればよかったのだ」と、
いろいろ取りさたをするの
ですが、それは見方が単純
です。人生というものは二
と二と合わせれば四になる、
と言ったように理屈で割り
切れるものではありません。

かつて臼杵市に高橋とい
う名医がおりまして、内臓
外科では実に無類の腕をも

っており、多くのむずかし
い病人を救うたのでありま
したが、先年、自分の妻を
子宮外妊娠の処置を誤って
死なせたのです。そのとき

高橋医師が述懐して「私は
癌以外の内臓の病気であれ
ば必ず手術で治すという自
信をもっておりましたが、
こんど最愛の妻を救うこと
ができなかったことによつ
て、はじめて仏教で言う因
縁ということをしみじみと
味あわせてもらいました」と
語りました。

高橋医師が最愛の妻を死
なせたということは、まこ
とに不幸ではありませんが、
人間能力の限界に気づき、
因縁の力の前にカブトを脱
いだことは、精神的には大
きなプラスになっていると
思います。

現代の人間は自分達を幸
福にするため機械力を増進
し、電化をはかり、すべて
を機械化して便利な世界を

作り出したのですが、
その結果はどうでし
よう。自由を叫びな
がら機械の奴隷とな
り、人命を尊重しな
がら事故死をふやすと言っ
た結果になっているではあ
りませんか。

人生は人間のソロバンず
くめでは解決がつかえません。
世のことわざ「ソロバン
合うてゼニ足らず」という
ことばがありますが、人生
の実態をよく言っている
と思います。

仏の知恵というものは、
一面から申しますと、こう
いう実態を明確に知らしめ
る働きでありましょう。そ
こで私は「算用合うてゼニ
足らずが人間の世界、算用
合わずにゼニ足るが仏の世
界」であるとも言っており
ます。

現代に最も必要なものは
この「算用合わずにゼニ足
る」という世界を見出すこ
とではないでしょうか。

対話編 『浄土真宗』

②

B 「前回、人間の成立根拠として無量寿如来を見出したのは清沢満之先生であり、

三、(されど) 我は如来に非ず。

清沢先生の教えの流れの中で真宗の教化がなされてきたのが大谷派の同朋会運動であるというお話でした。

『曾我量深選集』第四卷三五頁、彌生書房

とあります」

一つに結びついていること、それが私たちの人生の支えになってくださるということでしたね」

B 「一の〈我は我也〉とは」

A 「ええそうです。アミダ仏と衆生の、すでに与えられている原関係のところ、私の根本的な居り場があるのです。このことは清沢先生の門下の曾我量深師の言葉にも表されています。曾我師の言葉に、

A 「我はいつでも今ここに

おいてのみ実存しているという限界、今この我を離れて我はない。ちょうど目の前の石ころと同じようなものです。他者に代わってもらえない我であり、宿業の身として今ここに生きていて、今を離れることも、ここを離れることもできない我、その我を我として確認している言葉です」

A 「それは大事なことで、如来のいのちの外に我はないということ、私のいのちは如来のいのちに属しているということ、如来のいのちに於て生きている我

B 「二の〈如来は我也〉とは」

B 「では三の〈されど我は如来に非ず〉とは」

A 「これは〈私は如来か〉といえはそうではなく、我は我であり如来は如来であって、我は如来ではない。私はいつでも今ここにいて、という限界におかれているという、全く限界づけられた我です。そして私は救われ手であって、如来は救い手です。如来はいつでもどこでも万人と共にまします普遍的な救い主です。決して〈救われ手〉である我と〈救い手〉である如来とは逆にはなりません。我は無

A 「それでは〈私に非ず〉とは」

限者のアミダ仏では全くない、ということ、それが〈我は如来に非ず〉ということ

B 「この三大綱目の中の〈如来は我也〉と表現されたのは清沢先生の影響でしょうね」

A 「ええそう思います。清沢先生は、衆生(私)が存在しているという今この事実、我ならざる無数のはたらきによって私にあり得ているというところに、無数のものはたらきの根源である寿命無量のアミダ仏を感じられたのが清沢先生です」

B 「そういう衆生の存在とアミダ仏の存在が元来一つであって、アミダ仏のはたらきによって私のいのちがあるということを親鸞聖人はどこかで仰っているのでしょうか」

A 「親鸞聖人の言葉の中にはこのことについて明瞭に述べられた所はありませんが、しかし、衆生とアミダ仏は元来一つであるというところを聖人の言葉の中に伺うことができるお言葉はあります。たとえば『唯信鈔文意』の中に見出すことができます」

B 「どういってお言葉ですか」

A 「親鸞聖人は聖覚法印の

A 「まず〈群生海の心〉とはなにかといえ、心と云って、現代の私たちが肉體ではない、いわゆる身心全体を心といっている、と見た方がいいと思いませんか」

B 「なぜですか」

A 「昔は身体と心とをわきりと二つに分けてものを考えていませんでした」

B 「現代の私たちは肉體と精神を分けて考える傾向が強いです、いつごろから

『唯信鈔』の文意(解釈)である唯信鈔文意を書いておられますが、現在、直筆本と写本がいくつありま

す。その中八十五歳の時の正嘉元年八月十九日の日付のある一本の中で、

この如来、微塵世界にみちみちたまへり、すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり。

と説かれています。ここに衆生とアミダ仏は一体であることが出ています」

B 「この意味を解説してください」

A 「まず〈群生海の心〉とはなにかといえ、心と云って、現代の私たちが肉體ではない、いわゆる身心全体を心といっている、と見た方がいいと思いませんか」

B 「なぜですか」

A 「昔は身体と心とをわきりと二つに分けてものを考えていませんでした」

B 「現代の私たちは肉體と精神を分けて考える傾向が強いです、いつごろから

人間存在を物質的な肉体と意識的な心でできているという風に、肉体と心を分けて考えるようになったのですか」

A 「それについてよくいわれているのは、ヨーロッパにデカルトという思想家が出たあたりからだといわれています。ルネ・デカルト

(一五九六年～一六五〇年)は人間における物質と意識とをわけて考えました。それ以後、意識の領域と物質の領域を分けるようになり、物質の領域を専門に取り扱う自然科学が発達してきたといわれますし、意識の領域では観念論が盛んになってきたといわれています」

B 「デカルトはフランス人で近代西洋哲学の祖といわれている人ですね」

A 「ええそうです。一方東洋では、身心は一つに見る場合が多く、心といえば身体はおのずと含まれていました。よく「我が身」といいますが、その「身」という言葉には心の働きを包んでいますように、心といえ

ば身を包んでいたといえます。そこで親鸞聖人が「群生海の心」といわれたときの心とは、身心全体をさして心といわれていると思えます。実は「この如来、微塵世界にみちみちたまえり、云々」という考えはもともと『大乘起信論』(以下、起信論と略称)という著名な仏教書に説かれている思想からきたものです。起信論は一八〇〇年ほど昔の仏教哲学の本ですが、起信論でいう「衆生心」が群生海の心にあたり、起信論でいう「真如」がここでの「この如来」に当たります。起信論では真如と衆生心は不可分・不可同の関係です。ですから真如である如来と衆生は一つ(不可分)でありながら、同じではない(不可同)といわれています。そういう起信論の思想が背景にあるの聖人のこのお言葉です」

B 「話しを少し戻しまして、「群生海の心」の心は、身心の全体をいうのですね」
A 「ええそう思います。ですからこの「心」は身心

の統一体としての身といえますから、それは「いのち」とか「存在」だといっていると思います。さらに言えば、古来、仏教では人間は心が主体であるという考え方があり、また如来の救いは心の領域にはたらいこぼされる面から、聖人は群生の存在を「群生海の心」といわれたともいえましょう」

B 「今日では存在のことを「いのち」とよく言いますから、現代の私たちには、群生海の心とは「群生のいのち」と受けとると、確かにこの聖人のお言葉は分かりやすくなります。では「この如来」は真如ともいわれましたが、「この如来」をどう理解したらいいですか」

A 「私たちが如来と言えば阿弥陀如来であり、阿弥陀如来の本質は光明無量と寿命無量といわれています。そして「寿命無量を本とし光明無量を用とする」(『真宗聖典』五八三頁)と古来から言われていますから、「本」は本体いわば実在のはたらき、「用」とは救いのはたらき

です」

B 「そうすると、ここではいのちという点から、この如来は寿命無量の量りなきいのちと見ていいのですね。そして群生海の心は衆生のいのち、という意味です」

A 「ええそうです。群生海とは衆生海で、いわゆる生きとし生けるものですから、

この如来、微塵世界に
みちみちたまへり、す
なはち一切群生海の心
にみちたまへるなり。

の意味は、量りなきいのちの如来は、全世界に満ち満ちていて、一切の生きとし生ける衆生のいのちにまでなつて満ちている、と理解できます。一切衆生のいのちにまでなつている。一切衆生のいのちは寿命無量のいのちのほかにはない、ということです。如来のいのちと衆生のいのちは不可分

で一体だということですが、しかも私のいのちは私が作りたいのちではありませんから、私のいのちは寿命無量のものであり、寿命無量に属しているといえます。

私たちはアミダ仏のいのちをたまわっている存在だといえます」

B 「曾我師が「如来は我也」といわれたのは、このことなのですね」

A 「ええ、私はそう受けとっています。ただ曾我師が続けて「されど我は如来にあらず」といわれます。これがまた大事なことになるのです」

B 「如来のいのちは私のいのちとなつているが、私は如来ではない、といわれるのです」

A 「ええ、如来のいのちは無量ですが、私の肉体のいのちは有限で生滅します。そして私は無明煩惱の心があり、如来のいのちであることを見失って、自分のいのちを私有化し、自分の小さないのちに非常に深く執着しています。この「いのち」は我のもの」という見方、それを仏教では有身見といえます。これがいわば根本の罪であり、ここからさまざまな悪と苦が発生してきます。どうして有身見が起

信心夜話

弥陀の本願は、今はだめでもまだなんとかなると思っっている間はいただけない、といわれるのでしよう。

自分は今これよい、自分は大丈夫だという人は本願を受け入れないのはよく分かります。自分はどうにもならないと思

い、自分はダメである、どうしてみようもない人間である

と思う人はすぐにでも弥陀の本願を聞いて、「阿弥陀様がいまこの私を助ける、引き受けて仰せくださっているのでは

あったか」といだけそうなの

ものですが、それがなかなか

いただけない。

なぜかという、自分はどう

うどうしてみようもない、救

われ難いものであると思っ

いても、今はダメであるがこ

れから更に聞法を重ねれば、

まだ何とかなるのではなかる

うか、というようにとかく未

来に期待する。それはまだ自

分がなんとかなれるという自

己信頼の心があるから、「まる

まる引き受ける」との阿弥陀

仏の本願がスツとただけな

いのです。

今もダメであるが将来もダ

禿頭 誠師の言葉に、

弥陀の本願は無常迅速の

機が御目当なれば、今死ぬ

る今墮つる機でなければ御

助けなさるゝことはできぬ。

もし然らざる時は、本願

所被の機にあらざるゆえ、

教にそむく機なるがゆえ、

百年存へて聞いても計らひ

の盡きる時なかるべし。

今死ぬるといふ事が思は

れずとも、呼吸の間、これ

来生とは佛の金言なるが故

に、たとひ気は百まで生き

る気でも、金言に間違ひな

しと、こちらの思ひに闕は

らず、腹は何と思ふとも、

今死ぬる、今墮つる機を今

の御助けと信じて、只今ば

かり只今ばかりと大悲の御

助けを仰ぐばかり。

（『求法用心集』より）

禿頭誠師が「弥陀の本願

は、今墮つる機でなければ御

助けなさるゝことは出来ぬ」

と仰せられますが、これは厳

しい言葉であると思ひます。

メであつて助かる可能性がないという、所謂「全く救い無し」というところにおいて弥陀の本願を受け入れざるを得なくなるのです。

ここで禿頭誠師が「今死ぬ

る身」「今墮ちる身」というの

は、今死ぬる身となればもは

や未来がない、しかも助から

ぬ墮ちる身ということでは

今死ぬるような人間は、も

う自分をどうするもこうする

もないのです。今死ぬる身に

は未来はもはやない、もう逃

げ道はないのです。ここに

いてはもうアミダ仏が「極重

悪人よ、そのまま称えるばか

りで引き受ける」という弥陀

の本願を受け入れざるをえな

くなるのです。ここにお助け

があるのです。

（了）

【住職雑感】 八〇歳近くに

もなると二階に上がるにも気合

を入れないと足があらならない。や

つと二階に上がると気温が三八度

だった。二階の小さな勉強部屋に

入ってまずクーラーを起動する。

一昨年まではクーラーがなかった

ので、設置して以後は本当に快適

になった。冬の暖房もそうだが学

生時代の頃と比べて、とてもあり

がたいのは暑さ寒さをエアコンで

快適に過ごせることである。ウク

ライナの戦争とか洪水とか原発な

どの問題で世界は悪化している

もいえるが、一方で住みやすくな

ったのも事実である。

今度の戦争は「西側諸国がロシ

アの体制を転覆させ、そしてロシ

アの資源を狙っている」という不

安がもとになって、ウクライナを

ロシアの同盟国にしたいために、

プーチンが始めたなどと聞く。我

が国も中国が攻めてくるのではな

いかという不安から防衛費を2倍

にする案が出ている。不安から

れての政策でなければいいが。防

衛も大事であるが、政治指導者の

「過剰な不安」は国の方向を誤る。

《秋季彼岸会》

九月二十二日（金）

午後二時始まり